

編集後記 もしもピアノが弾けたなら

俳優「西田敏行」さん急逝のニュースが入ってきました。

大好きな俳優さん。ドリフの全員集合に出たり、歌を出したり、才能豊かでチャーミングな方でしたが、個人的には大河ドラマの「飛ぶが如く」（西郷隆盛役）が今でも印象に残っています。西郷が自決した後の最終回のエンディング。西郷の妻役の田中裕子さんが生まれたばかりの赤ん坊を抱くシーン。桜島を見上げる田中裕子さんを上空から撮っていたカメラがズームアウトして、現在の鹿児島市内のビル群や街並みを背景にとらえます。幕末から明治という混沌としていた時代に、日本の将来のために命をかけて戦った先人たちがいた。そして、彼らが流した血と涙の上に、こんにちの日本があって、僕らの命がある。当たり前かもしれないけど、そのことにハタと気づかされて、自然と涙が湧いてきたのを覚えています。(^^)

僕は仕事柄、従業員研修の講師をさせていただくこともあります。

限られた時間で僕が話したところで、知識としては一時的に増えても、どこまで心に届いているだろうか。そんな思いが頭をよぎり、いつも人に思いを伝えることの難しさを感じています。(。_。)

仏典に「キサー・ゴータミー」という女性（母親）の説話があります。

我が子を失った母親が子どもを蘇らせてくれとお釈迦さまに懇願したところ、お釈迦さまは「わかった」と答えました。でも、それにこんな条件をつけました。
「一人も死人が出たことのない家からケシの実をもらってくるように」

彼女は村中の家々をたずねます。しかし、ケシの実はどこ家にもあるけれど、死人を出したことのない家はありません。なかには、自分と同じように子どもを亡くした母親がいたり、酷い目にあって大切な家族を亡くした人がいたり、自分よりもっと気の毒な人もありました。

母親はそこで「死」は誰も免れることができないものだ気づき、我が子の死を受容することができたのです。

この話は「学び」とは何かと、考えさせてくれます。お釈迦さまであれば、最初に母親の願いを聞いたときに、「生者必滅」とか「諸行無常」とか、世の理（ことわり）をその場で説いて、あきらめさせることもできたはず。でも、悲しみで心がいっぱい母親には、どんな言葉も（たとえそれが常識や正論であっても）心に届きません。母親の願いを否定せずといったんは聞き入れ、**自らの「気づき」を持てるように行動を促した**のです。

現代は、「**コスパ**」に加え「**タイパ**（タイムパフォーマンス）」の時代といわれています。

人手不足と長時間労働抑制のご時世なのでタイパ重視を否定することはできません。まして、**自らの「気づき」に勝る学びは無い**とわかっていても、「気づき」を引き出す指導は遠回りになるだけではなく難しいものです。それでも、部下へ指示、命令をするときは、右から左に済ますのではなく、きちんとその目的や背景、さらには仕事に対する思いまで共有して、自らの「気づき」につながるように努めたいものです。愛のない伝え方では、「**仏作って魂入れず**」なんてことになってしまいますからね。(+_+)

西田敏行さんが歌ってヒットした「**もしもピアノが弾けたなら**」は、自分の「思い」を上手く伝えられないもどかしくて切ない恋心が、なんだか西田さんのキャラクターと相まって、聴く人の心に染みる歌でした。俳優という枠に収まりきれない「唯一無二」の魅力を持った西田敏行さん。

本当に悲しくて残念でなりませんが、12月に公開されるという映画「**Doctor-X**」のエンドロールを観ながら、合掌させていただこうと思っています。でも人前（映画館）で泣かないかと我ながらちょっぴり心配です。涙もろかった探偵ナイトスクープの西田局長みたいに。



合掌



僕は失敗ばかりしてるので

かきの

わたし失敗しないので

そこに愛はあるんか？



アヴニール労務事務所 所長 柿野元博

<http://www.avenir-sr.jp>

E-Mail avenir4you@gmail.com